NIHON NO NATU*

29
Cinzontle

日本の夏

>Hiroe Minami**

南　裕恵

日本には四季があります。昔から様々な人々が深い思いをこめて、歌、詩、俳句に語り伝えてきました。春は三月から五月。自然がよみがえる、暖かい花見の季節。秋は九月から十一月。紅葉と作物の取り入れの時期。冬は十二月から二月。澄み切った、冷たい空気の中で迎えるお正月。そして、夏は活気にあふれる海水浴や山登りの時期。

しかし、日本の夏にはいつも悲しい暗い影があります。その理由は、三つの忘れがたい記憶がよみがえるからです。八月六日の広島原爆投下。八月九日の長崎原爆投下。そして、八月十五日の日本敗戦。

一九〇〇年以降、日本は徐々に帝国主義のもとに、周囲の国々を占領していきました。それに応じたアメリカ合衆国による経済封鎖は、一九四一年十二月七日、日本に真珠湾を空げきさせることになりました。そして、その翌日アメリカは日本に宣戦布告しました。その後、数年の戦いをへて、一九四五年八月六日、合衆国により広島に原子力爆弾が投下されました。三日後、長崎に原爆が落とされた後、日本は降伏を宣言せざるをえませんでした。

日本は、終戦後めまぐるしい復興をとげ、経済大国の地位を確保し、合衆国と肩を並べるほどに成長しました。現在は、中国やインドなどのアジア諸国にその地位を譲ることになってしまいましたが、日本製品の質の良さ、日本国民の勤労・勤勉さと、いつも最高の質を追求する精神は、今でも世界の国々から忘れられてはいません。そんな日本にとって、夏は、原子力爆弾の恐ろしさと戦争のおろかさを伝えていくために、大切な季節なのです。

私の家族は、広島、長崎からは遠く離れたところに住んでいましたから、原爆の被害は受けませんでした。家族や親戚の誰かが原爆の後遺症で命を落とすこともありませんでした。それでも、子供のころから何度も戦争や原爆について聞かされました。毎年夏休みの朝のテレビで広島の原爆死没者慰霊式の様子を見ました。

* El texto formal de literatura japonesa se escribe de arriba hacia abajo, los renglones se leen desde lado derecho hacia el izquierdo.
** Nació en la ciudad de Toba en la prefectura de Mie, Japón. Es profesora investigadora de la Lic. en Idiomas en DAEA UJAT.

今でもよく覚えているのは、一枚の写真です。そこには、地面に残されたひとつの影が写っていました。原爆が落とされた時、そこに座っていた人は、一瞬のうちに影だけを残して消え去ったのです。現代では、特殊撮影の技術を使って人一人を簡単に消えさせてしまうことができますが、私が初めてこの写真に出会った時、子供心に、人間を跡形もなく消してしまう原爆の恐ろしさを考えさせられました。

私は二十年以上前に、メキシコでの生活を決心してやって来ました。そのとき、持ってきた何冊かの本の中に、「わたしがちいさかったとき」という原爆を体験した子供たちの手記を集めた一冊があります。その中で、原爆投下後の一人の母親の姿を描いたのが次の詩です。

ばくだんがおちたあと
おかあちゃんが
だいじにのけていた米をたきながら
せんそうをして
なにがおもしろいんだろう
といって
たかしや　たかしや
まめでかえってくれと
いってなきながら
おむすびおつくる。

この詩にこめられた深い悲しみと心の痛みは、読む者に涙させると同時に、戦争を送り返してはならないという思いをつのらせます。何が起こったのか理解もできず、ただ黙って痛みや空腹を我慢する幼児。子供につらい思いをさせるのを耐えづらく感じながらも、何もできずに沈黙する親。詩の一行に言い含められた、「せんそうをしてなにがおもしろいんだろう」がただ一人の親の言葉ではなく、何千何百人の人々の気持ちだったことが伝わってくるのです。

私は、両親が健在な頃、夏休みを利用してよく一時帰国しました。空港ビルを出た時に感じる、じとっとした日本の湿気、そして、電車で東京の中心に出でた時の夏の暑さと高層ビル街のつくりだす独特の暑さが、私に、「帰ってきたんだ。」という思いを確かにさせました。父と母の待つ田舎に着くと、縁側の涼しい風、お盆の準備、お墓参りと、五感を通じて、様々な光景がよみがえってきます。そんな懐かしい気持ちの中で、日本の夏には、いつもあの悲しい記憶が影を落としているのだなと思います。

Taeko Minami[1], *Sashie.*

NOTA DE LA AUTORA

Mi agradecimiento al Mtro. Ricardo Arenas, quien me brindó la oportunidad de escribir en mi idioma; a Angélica María Fabila Echauri, quien me trazó el camino para rescatar las memorias de mi pueblo; al personal del Soporte Técnico del Centro de Cómputo Universitario, especialmente, al Ing. Nicolás Cruz Guzmán, quien hizo posible convertir mis pensamientos en un texto japonés.

[*] Nació en la ciudad de Toba en la prefectura de Mie, Japón, en 1962. Este año ganó el premio en el concurso de dibujo organizado por GALLERY HOUSE MAYA.